



巻頭特集

おもちゃ病院可児

「ありがとう」の言葉と笑顔がうれしくて

壊れたおもちゃの修理を通じて、ものの大切さを伝えていく、として平成17年より活動を始めた「おもちゃ病院可児」は、可児市社会福祉協議会登録のボランティア団体である。現在は可児市福祉センターのボランティアルームを活動拠点とし、毎月第一土曜日におもちゃ病院を開いている。桜が見頃を迎えた4月7日、おもちゃ病院可児は午前9時に開院した。



診察から退院まで

持ち込み



まずは持ち主である子どもから説明を受ける

聞き取り



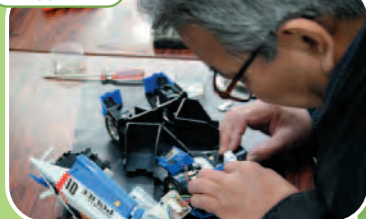
保護者から補足的に聞き取ることも

診察



早速診察に取り掛かる

治療



得意分野に分かれて修理

引き渡し



修理内容を説明する

退院



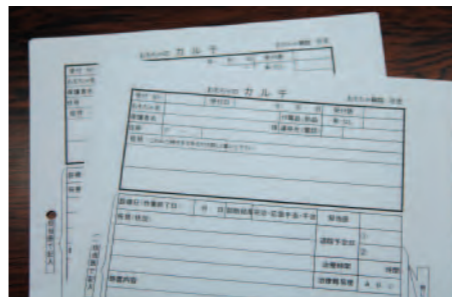
帰れて持ち主のもとへ

治療率は95%以上
名医が揃う病院

午前8時50分、福祉センター内ボランティアルーム入り口におもちゃ病院の看板が掲げられた。受付横のテーブルには、本日退院できることになったおもちゃたちが並ぶ。

壊れたおもちゃは持ち込まれたその場ですぐに直るものもあれば、ドクターが持ち帰って修理（入院と呼ぶ）するものもある。退院とは前回の開催時に預かったおもちゃの修理が終わり、持ち主の引き取りを待つことを指す。

それぞれのおもちゃにはカルテが付けられていて、病状（故障）の所見や処置内容が細かく記されている。基本的に治療費（修理代）



↑カルテは資料として保存。ドクター育成にも利用しようと、処置内容を整理してマニュアル化にも努めている

は無料であるが、部品交換が必要な場合などは実費となる。

取材日当日は8人のドクターが出動しており、治療器具（修理道具）の準備に余念がない。ドライバ、ラジオペンチ、ピンセット、カッター、ハンダゴテ、バッテリーチェンジャー、さまざまなサイズのボルトなどが、道具箱の中できれいに整理整頓されている。中にはドクター自作の道具類もあるという。

平年より5度以上も冷え込んだ花冷えのせいも、午前10時を過ぎても来院がない。持ち込まれるおもちゃの数量は天候によって左右されるとのこと。定期開催（毎月第一土曜日）の日には多いときで10件、少ないときには2件程度だそう。

これまでに持ち込まれたおもちゃは600個を超える。部品や材料が入手できないことなどから直せなかったおもちゃもあるものの、約95%を修理してきた。「何とか工夫して直してあげたい。で



↑数人で「治療」にあたることもある

きる限りのことをしたい」というドクターたちの熱意と、培った知識や技術がこの高い治療率に結びついている。おもちゃ病院可児には名医が揃っているのだ。

知恵を出し合って
おもちゃの治療を

おもちゃ病院可児の設立は平成17年7月13日。当時、可児市におもちゃ病院はなく、隣接する多治見市の「たじみおもちゃ病院」で現代の平野達也さんは活動していた。ぜひ地元可児でも実施できればと、当初は個人ボランティアとして社会福祉協議会に登録したのが始まりである。

翌年2月、福祉センターで第一回おもちゃ病院可児を開き、以後隔月で開催した。おもちゃ病院は好評で迎えられる。いっしょに治療に当たるドクターを募り、態勢が整ってきたため、その年の12月からは毎月開催に移行。現在16人のドクターが在籍し、定期開催以外にも可児市環境フェスタや七宗町神淵・上麻生の生涯学習まつりなどで活動を行っている。

午前10時30分過ぎ、1組の親子がおもちゃを引き取りに来た。

子どもたちの笑顔を
やりがいにしている

動かない、音が鳴らない、ライトが点灯しない、など持ち込まれるおもちゃの故障は千差万別。それでも故障原因を探っていくとほぼ3、4パターンに集約されるという。

動くおもちゃの場合は、ギヤ（歯車）の欠損が故障原因の多くを占める。また、電池端子のサビによる接触不良も少なくない。これは電池を入れっぱなしにしていたための液漏れや、ジュースなどをこぼして水分が内部に侵入することで起こる。サビを取るだけで動き出したり、音が鳴ったりして直ることも多いそう。単に電池切れの場合もあり、持ち込む前に一度確認するよう、平野代表は呼

び掛けている。

最近のおもちゃは中国製が増えてきた。安価ではあるが、作りが雑な上、部品の劣化も早い。電子部品などは日本製とは配線の色が違っているため、修理に神経を使う。「はめ殺し」と呼ばれる分解できないものもあり、カッターなどを使用して開けるが、慎重さが求められる。



↑退院予定のおもちゃたち



↑ドクター同士で原因や修理の仕方について検討し合う様子は、大好きなおもちゃを前にした子どものように楽しげだ

こうした修理の大変さと同時に、部品の調達も課題となっている。インターネットで購入したり、大型のホームセンターを利用したり、ときには名古屋の大須アメ横まで出掛けたりする。それでも揃わないものが出てくる。

おもちゃを持ち込む人の負担（部品交換の場合は部品代の実費が必要）を少しでも減らそうと、まとめ買いすることもありますが、置き場の確保も難しい。多種多様なおもちゃに対応するためには避けられない苦労、と平野代表は話す。



問い合わせ先 ●可児市福祉センター（可児市社会福祉協議会）

☎0574-62-1555

おもちゃ病院可児

検索

壊れてしまったからと捨てる前に、ぜひおもちゃ病院可児を訪ねてみてほしい。大切な思い出のあるおもちゃなら、なおさらだ。次の開催予定は、可児市福祉センターにおいて5月5日の午前9時から。不要になったおもちゃの回収も行っている。



↑数人のドクターが意見交換しながら

母親を相手にドクターが修理内容を説明したり、動作の確認をしたりしている間、子どもの視線はずっとおもちゃを追っていた。照れくさいのか、小さな声で「ありがとう」とお礼を言いながら帰って行った。

その後、当日初の持ち込みがあった。どんな症状（故障内容）なのか聞き取りを行って、早速診察へ。子どもの説明だけではわからないこともあるが、経験を積んだドクターにはある程度見当がつくという。



↑使い込まれた道具・工具も多い

鉄道玩具「プラレール」収集が趣味で、ジャンク修理などを楽しむという平野代表をはじめ、ドクターたちは小さい頃から機械いじりやものづくりが好きだった人ばかり。個々に得意の分野があり、互いに教え合って技術の向上に努めている。

帰れて持ち主のもとへ